

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	看護基礎教育における家族看護学教育の工夫と課題：看護系大学の教育者へのインタビュー調査より
別タイトル	Effort and Issues of Family Nursing Education in Basic Nursing Education
作成者（著者）	田久保, 由美子 / 臼井, 雅美 / 坂野, 朋未
公開者	FD委員会 健康科学ジャーナル編集会(東邦大学健康科学部)
発行日	2024.03.31
ISSN	24343838
掲載情報	東邦大学健康科学ジャーナル. 7. p.25 34.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	原著
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	10.14994/tohohsj.7.25
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD28227628

看護基礎教育における家族看護学教育の工夫と課題

—看護系大学の教育者へのインタビュー調査より—

田久保 由美子¹ 臼井 雅美² 坂野 朋未³

本研究の目的は、看護基礎教育において家族看護学を教授している教育者は、どのような工夫をし、課題を抱えているのか現状について明らかにし、今後の家族看護学教育の示唆を得ることである。看護系大学で3年以上家族看護学の教育経験のある教員13名を対象に、半構造化面接を実施した。得られたデータを質的に分析した。その結果、【学生のもつ家族観に注意を向ける】【学生を揺さぶり家族・家族看護の理解を深める】【家族看護の実践者となるための基礎をつくる】【家族看護教育の連続性の制約】【基礎教育での家族看護学教育の未確立】の5つのカテゴリーが形成された。家族看護学の教育者は、学生の感情や心を揺さぶるような授業を展開することで、学生の持つ家族観を広げ、看護の対象としての家族理解と将来の家族看護の実践者となるための基礎をつくることに取り組んでいた。基礎教育における家族看護学の位置付けと教育内容の確立が必要であることが示唆された。

キーワード 家族看護学 看護基礎教育 教育者 教育上の工夫 教育上の課題

I. 序文

世界一の超高齢社会と少子化、未婚・晩婚化の進行、離婚率や国際結婚率の上昇、LGBT (lesbian, gay, bisexual, transgender) の権利保障などにより家族の構造は多様化している。また、膨大化する医療費対策として在院日数の短縮化や、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムが推進されている（地域包括ケア研究会，2017）。このような家族や医療を取り巻く変化により、多彩な背景を持つ家族全体を視野に含めた看護が求められるようになり、平成29年に文部科学省で策定された「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」では、家族の発達課題の理解、家族機能の理解、家族をシステムとして理解し家族介入の基礎を理解することが学修目標として挙げられた（大学にお

ける看護系人材養成の在り方に関する検討会，2017）。

家族そのものを看護の対象とする家族看護学は、1970年代後半に米国で提唱され、1990年前後より国内の大学において教育が行われるようになった（法橋，2010）新しい看護学分野である。日本家族看護学会では、2008年と2014年に基礎教育における家族看護学教育の実態に関する全国調査を実施し（山本ら，2009；浅野ら，2016）、家族看護学教育を目的とした「特定の科目がある」と回答したのは大学で68.4%、教育機関全体では31.6%で、2008年と比較すると微増にとどまっており、看護基礎教育の中で家族看護学教育が浸透しつつあるとは言えない結果であったことを報告している。また、家族看護学教育を実施する上で、「何をどのように教えたらいいかわからない」「家族看護学を教えることは難しい」との回答が多くあったことも報告している。

1 東京医療保健大学千葉看護学部

2 東邦大学健康科学部

3 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科

このように、看護基礎教育での家族看護学教育の必要性は認知されながらも、実際の教育にあたっては発展していないことが伺える。そこで、基礎教育において家族看護学を教授している教育者は、どのような工夫をし、課題を抱えているのか現状について明らかにし、今後の家族看護学教育の示唆を得ることを目的とした。

II. 方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 研究協力者

看護系大学で3年以上家族看護学の教育経験のある教員13名を対象とした。家族看護学の教育・研究者の人的ネットワークを用いて、本研究の対象に合致し、かつ所属大学において家族看護学の教育を主に担っている教育者の紹介を得て選定した。

3. 調査方法

調査期間は、2015年11月～2017年5月。

半構造化面接を実施し、許可を得てICレコーダーに録音した。質問内容は、家族看護学の教授方法、到達目標、効果的と感じた教育手法、教育上の課題などとした。

4. 分析方法

分析テーマが明確であること、教育者間の教授方法の共通性についても明らかとしたいことから質的内容分析を行った。面接内容の音声データから逐語録を作成し、精読の上、「教育上の工夫と課題」についての文脈を抜き出し、意味内容を損なわないようにコード化した。その後、コードの類似性の観点からまとめ、抽象度を上げてサブカテゴリー、カテゴリーを生成した。また、家族看護学の到達目標については、科目修了時および卒業時についてそれぞれの内容を表にして整理し

た。

分析は質的研究支援ソフトNVivo11 (Lumivero社) を援用し、元データとの往復を繰り返しながらコーディングプロセスが共有できるように分析履歴の可視化を行い、質的研究の経験のある著者3名が統一した見解となるまで繰り返し分析を行い、信用性、妥当性を高めた。

5. 倫理的配慮

本研究は、昭和大学保健医療学部倫理委員会の承認を得て実施した (承認番号第 293号)。研究協力者には、紹介者を通さずに直接研究協力を依頼し、研究目的及び方法、研究協力における自由意思の尊重と中断の自由、個人情報保護について口頭と文書で説明を行い、文書で同意を得た。

III. 結果

1. 研究協力者の背景

協力者13名の家族看護学教育の教育歴は5年から24年、平均12.2年であった。家族看護学以外の専門領域は、在宅看護学4名、基礎看護学3名、成人看護学2名、小児看護学2名、母性看護学2名であった。家族看護学の開講時期は、1年次2名、2年次4名、3年次5名、4年次2名であり、全て必修科目であった。実習科目での配置は1名のみであった。教授している理論は、家族システム理論10名、家族発達理論10名、家族ストレス対処理論9名、システム理論4名、その他コミュニケーション理論、構造理論、構造機能アプローチ、家族同心球環境理論、役割理論、セルフケア理論であった。教授している家族看護モデルは、カルガリー家族看護モデル9名、渡辺式家族アセスメント/支援モデル7名、フリードマン家族アセスメントモデル3名、家族看護エンパワーメントモデル3名、家族生活力量モデル2名、その他家族アセスメント・介入モデル、CSFET式家族看

護過程、家族症候の影響因子スキーマと家族臨地推論であった。

協力者の家族看護学に関する学習方法は、大学院や研修会、学会参加による学習、本や文献等での独学であった。出版されている家族看護学のテキストを使用しているのは6名で、他は自作の教材等を用いていた。

協力者のインタビュー時間は、29分から90分で、平均61分であった。

2. 基礎教育での到達目標

家族看護学の科目終了時および卒業時の到達目標を図1に示した。科目終了時には①家

族の捉え方、②家族観の捉え方、③家族看護の捉え方、④家族看護の役割、の視点での目標が示された。卒業時には①家族の捉え方、②家族への関心、③家族看護への意識、④家族看護の実践の視点での目標が示された。

1～4年次および卒業時の到達目標として共通していたのは、①家族の捉え方の「システムとしての家族」で、卒業時にはシステムとしての家族には相互作用があると捉えられることを目標としていた。また、卒業時には、家族とコミュニケーションがとれたり、家族のアセスメントにより介入ができるなど家族看護の実践を5名が挙げていた。

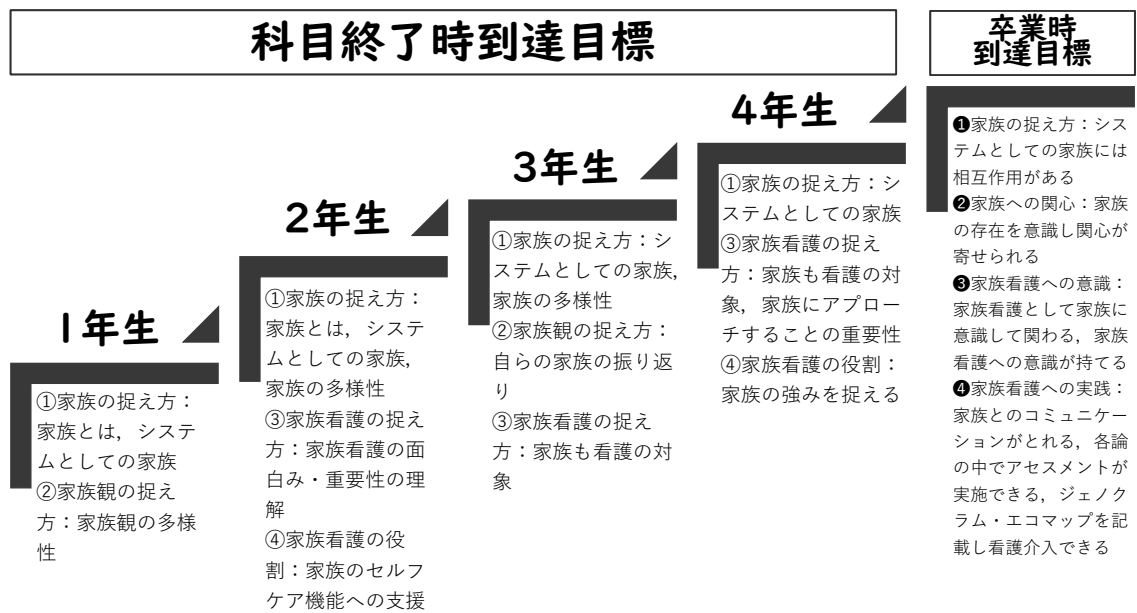


図1 家族看護学科目終了時・卒業時到達目標

3. 教育上の工夫や課題

教育上の工夫や課題について語られたのは261テキストで、59のコード、17のサブカテゴリーから、【学生のもつ家族観に注意を向ける】【学生を揺さぶり家族・家族看護の理解を深める】【家族看護の実践者となるための基礎をつくる】【家族看護教育の連続性の制約】【基礎教育での家族看護学教育の未確立】の5つのカテゴリーが形成された(表1)。

本稿では、カテゴリーを【】、サブカテ

グリーを〈〉、コードを『』、代表的な語りを「」で示す。

以下、カテゴリーごとに説明する。

1)【学生のもつ家族観に注意を向ける】

このカテゴリーは、〈敢えて自分の家族観に対峙させる〉〈学生の家族背景に配慮する〉〈看護の対象としての家族理解の難しさ〉の3サブカテゴリーから構成された。

協力者は、学生自身がもつ家族観に着目し、敢えて『自分の家族観と対峙させる』こ

表1 教育上の工夫と課題 *表内(該当協力者数, テキスト数)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
学生のもつ家族観に注意を向ける (11, 36)	敢えて自分の家族観に 対峙させる (6, 12)	自分の家族観と対峙させる (5, 8) 自分の家族観と対峙することの意義を伝える (4, 4)
	学生の家族背景に 配慮する (7, 13)	自分の家族を想起させない配慮 (3, 6) 表出された学生の家族状況を気にかける (3, 5) 学生の家族背景の複雑さ (2, 2)
	看護の対象としての家族 理解の難しさ (6, 11)	看護の対象としての家族イメージの難しさ (6, 9) 自分の経験内の家族理解 (2, 2)
学生を揺さぶり家族・家族看護の 理解を深める (13, 79)	体感を伴った家族理解 (10, 39)	映画・DVD・体験記を用いた家族の理解 (7, 16) 家族の立場を考え演じる (4, 7) 他の科目と連動させる (3, 6) 当事者家族の生の声 (2, 2) 理論より家族の立場を伝える (1, 5) 上級生による実習で出会った家族の語り (1, 1) データや記事による現代家族の理解を深める (1, 2)
	学生の参加をしかける (8, 27)	課題で理解を深める (4, 6) 学生の意見を引き出す (4, 5) 学生同士の講義・評価 (2, 7) 学生の心が動く問いを考える (2, 5) 学生の発言を肯定する (1, 4)
	実習経験を活かす (7, 13)	実習体験を踏まえた授業 (5, 8) 実習前に家族を意識づける (2, 3) 実習における家族看護モデル・理論の活用 (2, 2)
家族看護の実践者となるための 基礎をつくる (12, 91)	事例を活用する (11, 26)	事例を用いた家族看護の展開 (7, 14) 事例を用いた家族看護モデル・理論の理解 (7, 9) ジェノグラム・エコマップの活用 (2, 3)
	家族看護学の視座を 重視する (9, 27)	現代家族の多様性を踏まえる (5, 10) 多様なものの見方を重視する (3, 7) 家族をシステムで捉え他領域の看護との違いを示す (2, 5) 家族の強みに焦点を当てていく (2, 2) 中立的な立場であることの重要性 (2, 3)
	将来の実践を見据える (6, 20)	実践者による講義 (4, 5) 理論・モデルの活用を示す (3, 7) 家族への介入のモデルをみせる (1, 3) 家族インタビュースキルの演習 (1, 2) 家族との関係構築を体験できる科目としての発展 (1, 2) 家族に傷つけられることに備える必要性 (1, 1)
	専門教材を活用する (6, 11)	家族看護の教材を活用する (4, 7) 自作のテキスト教材を活用する (3, 4)
	家族看護を当然にする (4, 7)	家族の理解を基礎におく (2, 4) 家族看護をベースにして個人から視野を広げる (1, 2) 学生時代から力をつける (1, 1)
	つながらない教員間での 家族看護 (5, 12)	全領域にわたる家族の看護としての連携不足 (3, 4) 教員間での家族看護の共通認識の難しさ (3, 7) 一人の教員が一貫性をもって教える (1, 1)
家族看護学教育の連続性の制約 (6, 19)	学習継続・活用の制限 (3, 7)	実習での家族看護展開の難しさ (3, 5) 家族看護の継続学習の難しさ (1, 2)
	基礎教育での位置づけの 曖昧さ (7, 16)	家族看護学の位置づけの曖昧さ (3, 3) 基礎教育でのゴールの曖昧さ (3, 3) 学部の教育内容としての難易度の高さ (3, 6) 今の日本文化における家族看護のあり方 (2, 3) 必修の科目になることの必要性 (1, 1)
	不足する家族看護学 教育方法 (3, 9)	教員のニーズに合った教材の不足 (2, 6) 家族看護の教授モデルの必要性 (1, 2) 教育方法の選択肢が増える (1, 1)
基礎教育での家族看護学教育の未 確立 (10, 36)	教育側の人材不足 (3, 7)	専門外の教授に対する自信のなさ (1, 5) 教育者の不足 (1, 1) 専門領域もあるため専任できない (1, 1)
	カリキュラム上の制約 (3, 4)	学生人数の多さによる授業展開の難しさ (2, 2) 授業時間の短さによる授業展開の難しさ (2, 2)

とをしており、その場合は「プロになるために家族看護やるときには、自分はどのような家族観を持っているのかっていうことと対峙しないとそれはできない」など、『自分の家族観と対峙することの意義を伝える』ことをしていた。一方、『学生の家族背景の複雑さ』を考慮し、江戸時代の映画を用いたり、自分の家族の家系図を書かせないなど、『自分の家族を想起させない配慮』をしたり、「苦しくなった学生はコメントに書いてきます」など、『表出された学生の家族状況を気にかかけ』、声をかけるなど、〈学生の家族背景に配慮する〉ことを行っていた。

また、経験の乏しい学生ゆえに、「やっぱりいい家族が普通みたいな感じがある」などの『自分の経験内の家族理解』や、「実習前なので、患者さんもそうですし、ご家族にも直接接したことがないですよ」など、『看護の対象としての家族イメージのむずかしさ』を感じていた。

2)【学生を揺さぶり家族・家族看護の理解を深める】

このカテゴリーは13名全員の語りが含まれており〈体感を伴ったの家族理解〉〈学生の参加をしかける〉〈実習経験を活かす〉の3サブカテゴリーから構成された。

協力者は、『映画・DVD・体験記を用いた家族の理解』やロールプレイにより『家族の立場を考え演じる』こと、『当事者家族の生の声』や『上級生による実習で出会った家族の語り』による実際の家族の語り、『理論より家族の立場を伝える』、『データや記事による現代家族の理解を深める』のように感情が動かされ、〈体感を伴ったの家族理解〉となるような授業展開をしていた。また、事前にテキストや文献を読むなどの『課題で理解を深める』ことや、学生が考えてみたいと思うような『学生の心が動く問いを考える』、『学生の意見を引き出す』、『学生の発言を肯定する』、『学生同士の講義・評価』により、学生

が主体的・能動的に学修するような〈学生の参加をしかける〉ことを行っていた。

また、基礎実習等で受け持った患者さんの家族について振り返るなど『実習体験を踏まえた授業』や『実習前に家族を意識づける』、『実習における家族看護モデル・理論の活用』を行い、〈実習経験を活かす〉ことをしていた。これらは、家族看護学の開講時期が影響するため、開講時期を設定した理由と共に語られることが多かった。

3)【家族看護の実践者となるための基礎をつくる】

このカテゴリーは、最も当該テキスト数が多く、〈事例を活用する〉〈専門教材を活用する〉〈家族看護学の視座を重視する〉〈将来の実践を見据える〉〈家族看護を当然にする〉の5サブカテゴリーから構成された。

協力者の多くは、『事例を用いた家族看護の展開』、『事例を用いた家族看護モデル・理論の理解』、『ジェノグラム・エコマップの活用』のように、具体的な〈事例を活用する〉ことで、家族看護過程やモデル・理論の学習につなげていた。また、カルガリー家族看護モデルのDVDなどの『家族看護の教材を活用する』、自作のテキストや電子紙芝居など『自作の教材を活用する』といった〈専門教材を活用する〉こともしていた。

さらに、『現代家族の多様性を踏まえる』、『多様なものの見方を重視する』、『家族をシステムで捉え他領域の看護との違いを示す』、『家族の強みに焦点を当てていく』、『中立的な立場であることの重要性』のように、家族アセスメントや家族看護を実践する上で重要な〈家族看護学の視座を重視する〉内容を教えていた。

家族支援専門看護師や救急の場などの家族看護の『実践者による講義』や、『理論・モデルの活用を示す』、『家族への介入のモデルをみせる』、『家族インタビュースキルの演習』のように、家族看護の実践例や演習を取

り入れた授業をしていた。また、「家族に傷つけられることも非常に多いと思うんですね。そのときに自分が自分を守るために、どのように対処するか。そういったことも含めて教えていってあげなきゃいけないのかなというふうに思うんですね」と、今後家族看護を実践する上で、『家族に傷つけられることに備える必要性』や「学生自身が家族とどのように関係性をつくっていくかというようなどころまで体験できるような、そういう学問に発展していくといいかなというふうに思っています」など、『家族との関係構築を体験できる科目としての発展』について語るなど、〈将来の実践を見据える〉授業展開や課題を認識していた。

「基礎看護の中に、個人を、患者さんを理解する。あれと同じレベルで家族の理解っていう中でできたらいいな」など、『家族の理解を基礎に置く』、「すぐ個人っていうよりは、もうちょっとシステムで見てほしいっていうか、全体的に大きな視野を持って見てほしい」と、1年次に配置するなどの『家族看護をベースにして個人から視野を広げる』、「現場の人の家族看護の力を強めなければいけないんじゃないかなというふうには思っています。そのためには学生にまず注入をしたい」と、『学生時代から力をつける』のように〈家族看護を当然にする〉ことを意図して取り組んでいた。

4)【家族看護教育の連続性の制約】

このカテゴリーは、〈つながらない教員間での家族看護〉〈学習継続・活用の制限〉の2つのサブカテゴリーから構成された。

協力者は、「他の教員たちが家族っていうのをどう捉えてどう教えているのかっていうのがまず分からない」、「家族看護で自分の受け持ち患者さんの家族のアセスメントをするんだけど、それをその領域の先生方にフィードバックをしたりとか、その情報交換をしながら家族の視点も持ったケアを考えるって

いうことを、実際のところにつなげられてない」と、『全領域にわたる家族の看護としての連携不足』を感じていた。また、「教員が家族とか家族看護っていうところ辺を理解してもらってというのは難しいかもしれない」など、『教員間での家族看護の共通認識の難しさ』も感じていた。中には、『一人の教員が一貫性をもって教える』ことを重視しており、〈つながらない教員間での家族看護〉が課題となっていた。

「患者さんの家族に学生が関わるっていうことはやっぱりノーなんですよね」や、「実際に実習に行けば記録との戦いですから、そんな家族なんてもう忘れてるかもしれない」など、学生の『実習での家族看護展開の難しさ』や、「学生の理解は、その時は結構理解してると思う。でも忘れる」と、『家族看護の継続学習の難しさ』も感じており、〈学習継続・活用の制限〉の課題が挙げられた。

5)【基礎教育での家族看護学教育の未確立】

このカテゴリーは、〈基礎教育での位置づけの曖昧さ〉〈不足する家族看護学教育方法〉〈教育側の人材不足〉〈カリキュラム上の制約〉の4つのカテゴリーから構成された。

協力者は、「家族看護学っていうものが学部教育の中できちんと位置付けられるということが必要なんだけど、それが無い」など『家族看護学の位置づけの曖昧さ』や、「基礎教育の中でのゴールみたいなものをはっきりと理解してやってるかって言われると、確かにそこは曖昧なままにやっている」などの『基礎教育でのゴールの曖昧さ』、「リフレクションシートにもやっぱり必ず難しいっていうのは出てきます」、「CNSを教えているが故にCNS的なところもちょっと言っちゃってる感じがあって、そこをちょっと整理しないといけないのかなとは思ってるんですけど」など『学部の教育内容としての難易度の高さ』、「家族っていう定義とか概念とかも今すごく変わってきているので、いわゆる血縁

家族みたいなモデルをいつまでもかざすわけにもいきませんし、1人家族っていうのもありの時代ですから、家族看護っていう表現自体もそれでいいのかなっていう難しさもあります」のように『今の日本文化における家族看護のあり方』、『必修の科目になることの必要性』といった〈基礎教育での位置づけの曖昧さ〉があることについて語っていた。

また、「家族看護を理論的に考えたり、展開するときのいいビデオがあればいい」などの『教員のニーズに合った教材の不足』、「私はこんなふうに教えてるっていうような、教材のためのモデルみたいなものがあるといい」と『家族看護の教授モデルの必要性』、「学生にとっていろいろ教育方法、いろんなチョイスがあるとうれしいなと思ってます」と『教育方法の選択肢が増える』ことのように〈不足する家族看護教育方法〉についてや、『専門外の教授に対する自信のなさ』、『教育者の不足』『専門領域もあるため専任できない』といった〈教育側の人材不足〉、『学生人数の多さによる授業展開の難しさ』『授業時間の短さによる授業展開の難しさ』という〈カリキュラム上の制約〉の課題について語られた。

IV. 考察

1. 基礎教育における家族看護学教育上の工夫

家族看護を実践する上で、対象である家族の理解は欠くことはできない。山崎（2015）は、「私たちの誰もが家族の一員として実生活を送っており、改めて家族について考えなくてもわかっていると思っているので、目の前の患者の家族を自分なりの家族観でとらえてしまい、看護実践に影響を与える可能性が高い。家族を客観的に捉えていくことが、効果的な看護介入に求められる」と述べている。家族看護学の教育者である本研究の協力者は、『自分の家族観と対峙させる』のか、『学生の家族背景の複雑さ』を考慮し『自分

の家族を想起させない配慮』をするのかの違いはあるものの【学生のもつ家族観に注意を向ける】ことを行っていた。家族看護学の教育内容はいずれも家族に関することであり、『自己の経験内の家族理解』に留まっていること含め、学生自身がその時点で抱えている家族観を自己認識できる機会があることは、その後の家族看護の実践者となる上でも重要である。さらに、『自分の家族観と対峙することの意義を伝える』ことにより、自分の家族観をより意識し、その意味付けをすることの意義は大きいと考える。

看護の対象となる家族の理解においては、ロールプレイや当事者の声、教員との対話、実習体験の活用等の方略により【学生を揺さぶり家族・家族看護の理解を深める】教育実践を全員が行っていた。対象理解は知識の教授のみでは成し得ない。山本（2006）は、看護における他者理解は、何かを協働で達成することを目的として、お互いの考えを理解しようとする協力関係と、世話をしたり、満足させたりすることを目的として、相手の気持ちを理解しようとする親和関係になると述べている。これらの対象理解には対象の視点に立つことが必要であり、学生の感情や心を揺さぶるような授業を展開することで、学生自身の家族観を広げ、授業で取り上げられた家族に心が動かされる体験を意図的に行っていたのではないかと考える。中でも約半数の協力者が映画や体験記等を用いていた。家族は患者を含めた複数の家族員により成り立ち、相互に影響し合っている。これらの教材は家族員の関係性や役割、個々の思い、家族の歴史などがストーリーとして描かれており、家族を理解する上で必要な要素がふんだんに含まれている。娯楽で見る映画とは異なり、意図をもって視聴することでの学修効果は高いと考える。また、協力者4名がロールプレイを用いていた。古味ら（2012）は、ロールプレイが他者の意図の理解に影響を与

えることを大学生を対象とした実験から明らかにしている。看護ケアへの家族の参加に対する看護師の積極的態度和る関係する要因についてのスコーピングレビューによれば、初期キャリアの看護師には家族の臨床的なシミュレーションシナリオによる教育が推奨され、家族とのコミュニケーションスキルや家族ケアに対する態度を向上させることが報告されている (Barreto et al., 2022)。ロールプレイのような演習は、対象理解に加え、家族看護の実践力育成にも効果的であったのではないかと考える。

本研究の協力者のうち5名は、家族看護の実践ができることを卒業時の到達目標としていた。実習科目として教授していたのは1名のみであったが、卒業し看護職となれば、家族と関わることは当然となる。協力者は、家族看護を実践することを見越し、事例を用いた家族看護過程の展開や家族看護学の理論やモデルの活用等【家族看護の実践者となるための基礎をつくる】ことに取り組んでいた。中山ら (2016) は、継続教育で家族看護教育を実施している施設は22.7%と少なく、実施していても平均4.2時間と短いことを報告している。このような卒業教育の現状を踏まえると、基礎教育において家族看護学を学び、実践者となる基礎を身に付けること、そのための教育がなされている意義は大きい。

2. 基礎教育における家族看護学教育の課題

看護の対象は、個人・家族・集団・コミュニティであり、各看護学分野でも家族への看護について扱う。しかし、〈つながらない教員間での家族看護〉のように、家族看護学の独自性の理解と、他看護学分野との連携不足が存在していた。家族看護学は1990年代に本邦で紹介されるようになったため、現在教授側の立場にある看護職で基礎教育での学修経験がある人は多くはない。本研究の協力者も大学院や学会、独学等で学んでおり、家族

看護学の学習経験や関心の程度等による教員間の差が存在し、影響していると考ええる。本研究の課題として挙げた【家族看護教育の連続性の制約】【基礎教育での家族看護学教育の未確立】は、どちらも基礎教育での家族看護学の位置づけの曖昧さ、教育内容の不明瞭さが影響していると推察する。浅野ら (2016) は、看護基礎教育における家族看護学教育の実態に関する調査結果をふまえ、家族看護学会からの提言として、‘家族看護教育を目的として特定科目’設置の必要性’と‘家族看護学教育の内容と具体的方法の確立’について挙げ、看護学教員全体の家族看護学教育の重要性に関する共通認識の必要性や、学会として推奨する、サンプルカリキュラムや教材の作成等の提案の必要性を述べている。本研究の協力者の教授科目は全員必修科目ではあったが、その開講時期は、1年次から4年次まであり、教育課程内でも基礎的な科目に位置付けるか、発展的科目に位置付けるかは様々であった。しかし、到達目標ではシステムとしての家族の捉え方は共通しており、基礎教育において重視すべき内容であると考ええる。藤田ら (2019) は、教育課程別看護学生の臨地実習における家族の学びの特徴について明らかにし、2年課程においても家族と患者をシステムとしてとらえられるような教育の必要性について言及している。本研究は大学での教育内容に限定しているが、システムとして家族を捉えることは全ての看護職に必要となる教育である。一方で、『学部の教育内容としての難易度の高さ』についても挙げており、基礎教育での教育内容の早い確立が求められる。

V. 結論

家族看護学の教育者は、学生をゆさぶりながら学生の持つ家族観を広げ、看護の対象として家族理解と将来の家族看護の実践者となるための基礎をつくることに取り組んでい

た。基礎教育における家族看護学の位置付けと教育内容の確立が必要であることが示唆された。

VI. 利益相反

本論文発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはない。なお、本研究はJSPS科研費 JP15K11520の助成を受けて実施した。

引用文献

浅野みどり, 荒木暁子, 荻野雅, 鳥居央子, 長戸和子, 藤野崇…山本則子 (2016) : 看護基礎教育における家族看護学教育の実態に関する調査 (追跡調査) 2014. 家族看護学研究, 22 (1), 48-59

Barreto, M. D. S., Marquete, V. F., Camparoto, C. W., Garcia-Vivar, C., Barbieri-Figueiredo, M. D. C., & Marcon, S. S. (2022). Factors associated with nurses' positive attitudes towards families' involvement in nursing care: A scoping review. *J Clin Nurs*, 31 (23-24), 3338-3349. doi.org/10.1111/jocn.16226

地域包括ケア研究会 (2017) : 地域包括家研究会報告書 —2040年に向けた挑戦—.

https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2022/11/h28_01.pdf

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 (2017) : 看護学教育モデル・コア・カリキュラム ～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～.

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf

藤田あけみ, 橋本美亜, 多喜代健吾, 北宮千秋, 三國裕子, 西沢義子... 市川美子 (2019) : 看護学生の臨地実習における家族

についての学び —教育課程別の特徴—. 日本ヒューマンケア科学会誌, 12 (2), 35-44.

古見文一, 子安増生 (2012) : ロールプレイ体験がマインドリーディングの活性化に及ぼす効果. 心理学研究, 83 (1), 18-26.

法橋尚宏編著 (2010) : 新しい家族看護学第1版 : 理論・実践・研究. メヂカルフレンド社.

中山美由紀, 岡本双美子 (2016) : 継続教育における家族看護教育の現状と課題. 大阪府立大学看護学雑誌, 22 (1), 45-53.

山本勝則 (2006) : 看護における「他者理解」. 熊本大学社会文化研究4, 419-433.

山本則子, 荒木暁子, 前原邦江, 荻野雅, 中村由美子, 深堀浩樹, 森山美知子 (2009) : 看護基礎教育における家族看護学教育の実態に関する調査報告. 家族看護学研究, 14 (3), 66-74.

山崎あけみ, 原礼子編著 (2015) : 看護学テキストNiCE 家族看護学 改訂第2版 : 19の臨床場面と8つの実践例から考える. 南江堂.

Effort and Issues of Family Nursing Education in Basic Nursing Education

Yumiko TAKUBO¹, Masami USUI², Tomomi SAKANO³

¹Chiba Faculty of Nursing Tokyo Healthcare University, ²Faculty of Health Science Toho University,

³Department of Home Health and Palliative Care Nursing, Graduate School of Health Care Sciences,
Tokyo Medical and Dental University

The purpose of this study was to clarify the current situation of how educators teach family nursing in basic nursing education. Semi-structured interviews were conducted with 13 faculty members with at least three years of experience teaching family nursing at nursing colleges. The data obtained were analyzed qualitatively. As a result, five categories were extracted: “paying attention to the view of family that students have”, “urging students to deepen their understanding of family and family nursing”, “creating a foundation for becoming family nursing practitioners”, “limitations of the family nursing Education continuum”, and “unestablished family nursing in basic nursing education”. Family nursing educators were engaged in urging students to broaden their view of the family, understanding the family as a subject of nursing, and creating a foundation for becoming future family nursing practitioners. It was suggested that it is necessary to establish the positioning and educational content of family nursing in basic education.

Key words Family Nursing Basic Nursing Education Educator Educational Effort
Educational Issues